

# かみさま　い　とお 神様の言う通り!①

イケメンきつねの『家族』ができました!?

たかすぎりっか  
高杉六花・作

はくろう  
白雨より・絵



アルファポリスきずな文庫

# もくじ

- ① 初恋の思い出と願掛け 6
- ② 待ちに待った巫女修行！ 14
- ③ 繰り返し見る夢 19
- ④ 言えない夢 26
- ⑤ 悲しい誕生日と宝物 38
- ⑥ 神様なんていない 49
- ⑦ 神様、激おこ！ 61
- ⑧ 見えないものが見える件(泣) 75
- ⑨ 転校生はうちの居候 89

- ⑩ 天音と陽太のバチバチバトル!? 105
- ⑪ 地縛霊の願い 126
- ⑫ 琴美のピンチと蘇る黒歴史 134
- ⑬ ツクモ神と黒歴史 143
- ⑭ 増えた居候と、近づく決戦 165
- ⑮ 決戦！ 178
- ⑯ 神様の正体 192
- ⑰ 最初で最後のデート 203
- ⑱ 神様が帰ってきた？ 220
- ⑲ 地の底で 229



とう じょう じん ぶつ しょう かい  
登場人物紹介

スイ

あすか はつこい おいて  
飛鳥の初恋の相手。  
あお ひとみ いんしょう てき  
青い瞳が印象的で、  
ミステリアス。



かげ まる  
影丸

むくち むひょうじょう  
いつも無口で無表情だけど、  
じつ やさ  
実は優しい。  
いま すこ し じょう  
ただ、今は少し事情が  
あるようで……？

びやく れん  
白蓮

かみ  
まっしろな髪と  
あか め  
赤い目をした  
なぞ じょせい  
謎めいた女性。



あすか  
飛鳥

ちよつとぼんこつな  
ちゅうがくいちねんせい  
中学一年生。  
はつこい おいて  
初恋の相手をさがすために、  
ほか だれ こと  
「他の誰にも恋をしない」という  
かんが  
願掛けをしている。

く おん  
久遠

とつ ぜん あすか まえ すかた あらわ  
突然、飛鳥の前に姿を現した  
こく ほうきやう  
国宝級イケメンその二。  
ちやらくて、いつも楽しそう！  
ほんにん いわ  
本人曰く、  
「ビジュがいい」。

あま ね  
天音

とつ ぜん あすか まえ すかた あらわ  
突然、飛鳥の前に姿を現した  
こく ほうきやう  
国宝級イケメンその一。  
ちよつとえらそうだけれど、  
あすか  
飛鳥をぜったい  
まも  
守ってくれる。

## ①初恋の思い出と願掛け

小さいころのことって、どのくらい覚えてる？

私はね、ところどころだけど、けっこう覚えてるよ。

お父さんとお母さんの手を離して、幼稚園バスに乗り込んだときのこと。

かわいい着物を着せてもらって、神社の境内で七五三の写真を撮ったこと。

朱色の鳥居。左右に並んだ、優しい顔をした狐の石像。

その中でも一番覚えてるのは……

神社の裏の森で出会った、男の子のこと——

\*\*\*

彼に初めて出会ったのは、私が五歳のときだった。

「うつわあ……」って、うつかり声もれちゃったほどの超絶イケメンで……

光をまとったみたいな、キラキラ輝く銀色の髪。

深く透きとおる泉のような、神秘的な青い瞳。

ずっと通った鼻筋に、凜とした強さを感じさせる目元。

金や銀の細かい模様がたくさん入った着物には、宝石や飾りがたくさんついていて、七五三

の晴れ着よりもずっととずっと豪華。

耳や首にも宝石がきらめいていて、まるで絵本から飛び出してきた王子様のような、現実離

れした美しさだった。

あの日、私は……

神社の裏で見かけた、もふもふの犬を追いかけていたら、森に迷い込んでしまったの。

そこが、お父さんとお母さんに「近づいちゃいけないよ」って言われていた、『龍神様の

森』ってことにも気がつかずに。

夢中で森の中を走っていたら、青く澄んだ泉と、古い祠を見つけたんだ。

泉があまりにもきれいだっただから、もふもふのことを忘れてずっと眺めていた。



そうしたら、いつの間にか日が暮れてしまつて……

ハッと気がついたときには、私は狼と蛇に囲まれていた。

薄暗い森の中で狼と蛇に囲まれるなんて、そんなことある!? って思うでしょ?

そんなことあったんだよ!

狼は「グルルル……」って低くうなりながら牙をむいてくるし、蛇は今にも飛びかかってきそうな勢いで「シャーッ!」っておどかしてくるし、大パニック!

足がすくんで泣くことしかできなくて、「人生終わった……」って、本気で思った。

あきらめかけたそのとき、彼がヒーローのように現われたんだ!

私より少し背が高く、豪華な着物のキレイな男の子が、ひらりと前に立った。

「そいつらに食われたくなければ、じつとしていろ」

その声とともに、彼の体がふわーつと光つて、手からシャキーンって刀が出て、ふわりと浮

いたかと思つたら、シュパパパパン! って、狼と蛇を追い払ってくれたんだよ!

って、……なに言ってるかわからないよね。

私もよくわからないんだ。あはは……

五歳のころの出来事だし、あまりにも怖すぎて、記憶がごちゃごちゃになってるのかも。

彼があまりにも神々しくてかつこよすぎたから、思い出に『ヒーローエフェクト』がついてる説もある。

じゃないと、そんなのありえないよね。

光ったり、手から刀が出てきたり、浮いたり……なんて、人間ができるわけがない。

だから、現実には、そこら辺に落ちてる木の棒を振り回して、野良犬を追い払ってくれた……程度のことなのかもしれないけど。

だとしても、彼が『ピンチを救ってくれたヒーロー』なのは変わらない。

次の日も、そのまた次の日も、彼に会いたくて、私はこっそり神社裏の森に行った。

いつも会えるわけじゃなかったけど、会えたときはたくさん遊んだよ。

絵本やおもちや、テレビやタブレットがなくても、とつても楽しかった。

森には遊べる場所がたくさんあったし、彼はおもしろい遊びをたくさん知っていたから。

青く澄んだ泉をのぞき込んで、「お魚いるかな？」って、顔を寄せ合ったり。

笹の葉で作った舟を、泉にそつと浮かべてみたり。

木の枝で地面に絵を描いたり、落ち葉を集めてばさーってかけ合ったり。

ピカピカのどんぐりを拾って、木登りをして、寝転がって森の音を聞いて……

心の中が、わくわくとキラキラでいっぱいだったな。

春も夏も秋も冬も、時間を見つけては、お父さんとお母さんの目を盗んで会いに行った。

今でも、瞳を閉じれば、彼のキレイな横顔と、私を呼ぶ声思い出す。

『飛鳥、こつちだ』

『気をつけろ。お前はどんくさいからな』

『おい、また転ぶ気か？ まったく、見てるだけでヒヤヒヤする』

……あ、あれ？

甘酸っぱい思い出のはずなのに、ひどい言われようじゃない!?

ええつと……

まあ、ちよつと口が悪くて偉そうなしやべり方なんだけど、本当は優しい人なんだよ。

穴に落つこちた私を引き上げてくれたり、滑って転んだときは手を差し伸べてくれたり。

……つて、私つてば、本当にどんくさかったな。ううつ。はずかしい。

でもね、不思議なんだ。

あんなに遊んだのに、なぜか名前を思い出せないの。

そもそも教えてもらっていないのかもしれない。

彼は、私よりちよつと年上つぽくて、すごく大人びていて頭も良くて。

名前も住んでいるところ、年齢も、何を聞いてもはぐらかされた気がする。

だから私は、心の中で『スイ』って呼んでいた。

泉の水面のような、神秘的で美しい青い瞳をしていたから。

幼いなりに考えた、お気に入りのお名前。……なんだけど。

「短絡的な名前だな」って笑われそう、本人の前では呼んだことはないんだ。

それどころか、スイのことは誰にも話したことがない。

夢じゃない？ とか、本当に人間？ オバケじゃない!? って言われるのが怖くて。

私、オバケや怪談が大大大嫌い！

でも、神社の神様にだけは、話してる。

「また、スイに会えますように」って、毎日お願いしてるんだ。

スイが人間じゃなくても……たとえ大嫌いなオバケでも、妖怪でも、宇宙人だったとしても、いいんだ。

また会えるなら、なんだっていい。

スイは、私の初恋だから……

彼と過ごした日々は、今でも胸の奥にそつとしまつてある、大切な思い出。

名前も住んでいるところもなにも知らないけれど、いつかまた会えるって信じてるの。

「神様、お願いします。またスイに会わせてください。スイに会えるなら、他の誰にも恋をし

ません」

私は龍神様に、そう願掛けしてるんだ。

## ② 待ちに待った巫女修行!

九月に入り、秋の気配がただよう今日このごろ。

私、一宮飛鳥は、大好きな唐揚げの山を前に、キラキラと目を輝かせていた。

「いただきます〜す!」

今日は、久しぶりに家族三人そろつての夕ごはん。

お祭りの準備で大忙しのお父さんもいっしょで、とつてもうれしい。

「うーん。おいしい!」

唐揚げにかぶりついた私に、お母さんがにっこり笑って言った。

「飛鳥の誕生日、もうすぐだね! 十三歳か〜」

「うん! やつとだよ」

二日後の九月十日は、私の誕生日。

この日をずっと待っていたんだ!

お味噌汁をふーふうしているのと、湯気の向こうに、お父さんとお母さんの笑顔が見えた。

私のお父さんは、ここ『天翔神社』の神主で、お母さんは巫女。

天翔神社は、町でいちばん古くて、いちばん大きな神社だ。

この町には、龍神様の伝説があるんだよ。

私のおじいちゃん、そのまたおじいちゃん、さらにさらにおじいちゃんが神主だった時代から、龍神様は「天翔の神様」として、町の人たちに大切にされてきたんだって。

だから神社の名前も『天翔神社』。

神社には、空と大地を司る龍神様が祀られている。

朱色の大きな鳥居が目印で、初詣や例大祭は、たくさんの人でにぎわうの。

とつても大切な神社のお祭り——例大祭は、今月末の九月三十日。

もう三週間後!

町の人はもちろん、私も毎年楽しみにしているんだ。

私、この天翔神社が大好き。

本殿の前には大きな鈴が吊るされていて、誰かがお参りに来るたび、しゃん、しゃん、と鈴の音が響く。

願ねがい事ことが書かかれた絵馬えまが、風かぜが吹ふくたびにカタカタと優やさしい音おとを立てる。

砂利じりを踏ふみしめる音おと、風かぜにゆれる木々きぎのざわめき――

神社じんじの敷地しきちに家いえがある私わたしは、そんな環境かんぎやうで育そだった。

だからかな。自然しぜんと、「将来しやうらいは巫女みこになりたい」って思おもうようになった。

お母おちかさんみたいなの、立派りっぱな巫女みこになるのが私の夢ゆめ。

十三歳じゅうさんさいは、巫女修行みこしゆぎやうが始はじまる特別とくべつな歳としなんだ。

中学ちゅうがく一年生いちねんせいになった私わたしは、十三歳じゅうさんさいの誕生たんじゆう日を指折ゆびおり数かずえて待まっている。

「ふふふつ。あと二日ふつかか〜！ 巫女修行みこしゆぎやう、楽たのしみだな〜」

声こゑをはずませた私わたしを見て、お父おとうさんが背筋せすじをすつと伸のばした。

その仕草しきそうだけで、空気が引き締しまる。

「飛鳥あすかも、いよいよ巫女修行みこしゆぎやうか」

お父おとうさんが、静しずかに言いった。

「うん。いよいよだよ」

「そうか……」

湯ゆのみを手てに取とって、お茶ちやをひとくち。

そして、ふうつと息いきをはくと、お父おとうさんは少すこし真剣しんけんな顔かおになった。

「……楽たのしみにしてくれてるのは、うれしいけどな」

「えつ……」

私わたしは思おもわず身構みがまえた。

どうしちゃったんだろう。いつも穏おだやかで優やさしいお父おとうさんの表情ひょうじやうが、厳きびしい。

「修行しゆぎやうは、簡かん単たんなことじゃない。覚悟かくごはできてるか？」

「……っ」

不安ふあんを感じかんじたのは一瞬いっしゆんだけで、すぐにうれしさがこみ上げてくる。

だって、お父おとうさんが私わたしを子こども扱あつかいしてないってことだから。

でも、それだけ巫女みこの修行しゆぎやうは大切たいせつで、神様かみさまに仕つかえるのは重おもいお役目やくめってことだ。

「うん、覚悟かくごはできてるよ！ 私わたし、りっぱな巫女みこになりたい！」

声こゑに力ちからをこめると、お父おとうさんは目めを細ほそめて、いつもの優やさしい顔かおでうなずいた。

その横よこで、お母おちかさんも優やさしく笑わらっている。

私わたし、ずつとずつと巫女みこの修行しゆぎやうを楽たのしみにしてきたんだ。

どんな大変たいへんな修行しゆぎやうでも、がんばりぬくって決きめてるの。

もちろん、町にとつてもお父さんとお母さんにとつても大切な、この神社を守りたいって気持ちが一番。

……なんだけど。

実は、もうひとつ、誰にも言っていない目的がある。

それはね……

巫女になれたら、スイに会えるかもしれないの！

### ③ 繰り返して見る夢

夜ごはんを終えてお風呂に入り、部屋の窓を開けた。

ひんやりとした秋の夜風が、すうつと頬をなでていく。

私の部屋の窓からは、神社の裏に広がる森が見える。

時々、こうやって森を眺めては、スイを思い出すの。

「もうすぐだよ。巫女になれば、また会えるかもしれない」

小さくつぶやくと、自然と笑みがこぼれた。

うちの神社のことは、学校の友だちはもちろん、町のみんなが知ってる。

だけど神社裏の森は立ち入り禁止になっているから、森の奥にひっそりとある『龍神様の

祠』と『龍神様の泉』のことは、誰も知らない。

知っているのは、お父さんとお母さんと、私だけ。

そう！ スイとよく遊んでいたあの泉は、実は『龍神様の泉』で、近くにあった祠は『龍神

様の祠』だったの！

何も知らなかった私は、スイといっしょに泉に笹舟を浮かべたり、お魚を探したり、バシヤ水遊びしたり……

龍神様の泉で、おもいつきり遊んでしまったことになる。

(なんてバチあたりなことをしてしまっただろう)

率先して遊んだのは、スイだけどつ。

あのころ、私たちは龍神様の泉で待ち合わせをして、たくさん遊んだ。

でも、楽しい日々はそう長くは続かなくて。

私が小学一年生のときに、お父さんとお母さんに見つかってしまったの！

「お友だちと遊んでいたんだよ！ ほら！」

そう言っ振りに向くと、スイの姿はどこにもなかった。

やつぱり、スイはオバケだったのかも!?

よくよく考えたら、立ち入り禁止の森にひとりでいる、銀髪の男の子なんて変だよ。

森の妖精？ オバケ？ 妖怪？ 森の管理人さんの子ども!? いや、管理人さんなんていな

いよね……って、いろいろ考えたけれど、いまだにスイの正体はわからない。

あれから、私は森に入ることを禁止されてしまったんだ。

入り口には柵がつけられて、カギもかけられた。

森にも龍神様の泉にも行けなくなってしまうと、スイにも会えていない。

本当の名前も、住んでいるところも、なにも知らない、私の初恋の人——

「会いたいな……。会えるかな……」

最後に会ってから、もう六年。

私のことなんて、スイはとっくに忘れちゃってるかもしれないけど……

ひとつだけ希望があるんだ。

巫女になれば、神社の裏の森に入ることができるの。

龍神様の祠のお掃除は、巫女の大事なお役目なんだって！

だから私は、巫女になって、またあの森に入れる日を心待ちにしている。

(神様、お願いします。スイに会わせてください！)

それは、誰にも言えない、私だけの秘密の願い。

毎晩、布団の中で、神様にお願しているの。

だからかな。たまりに、スイの夢を見るんだよ。

その夢は、いつも同じ場面。私はひとり、真つ暗な森の中にいるの。背の高い木々が風にざわざわ揺れて、怖くて動けなくて、声も出なくて。立ちすくんでいると、黒い影が、ゆつくりとこつちに近づいてくるんだ。

「……っ！」

私は毎回、そこで息をのんで、ぎゅつと目を閉じようとするんだけど。

夢って残酷。近づいてくる黒い影を見たくないのに、バツチリ見えちゃう。

それは、目も口もない、得体のしれないオバケ！

「ぎゃあああ！」

かわいさのかけらもない声で思いつきり叫んでも、目はさめてくれない。

それどころか、足がすくんで体が動かない大ピンチ！

(こわい。こわい。こわい——！)

ぎゅつと体を縮こませて、座り込んだそのとき——

「飛鳥は本当にびびりだな」

どこからともなく声がして、スイが現れるの！

まるで霧の中から現れたみたいに、静かにそこに立つてる。

銀色の髪が、月明かりを反射してキラリと光って、私の胸はどくと高鳴る。

「ただだだだつて、オバケ——！」

「下級の使い魔だ。恐れることはない」

さらりと言つて、腰の抜けた情けない私を守るように、スイは黒い影の前に立ちはだかる。彼が手のひらを広げると、白く光る刀が現れるんだ。

マジシャンなの？ つて、ツツコミを入れる心の余裕はなくて、私はいつも泣いてる。

すつと刀を構えたスイが、地面を踏みしめて、風のように高く跳んだ次の瞬間。

シユツ——！

青く光る刃が、夜の闇を切り裂く。

黒い影は、ひとすじの光に貫かれ、霧みたいに消えていった。

「す、すごい！」

音もなく地面に降りたスイは、私の前に静かに立つ。

その手に、さつきまであったはずの刀は、もうない。

「ありがとう……。助かったよ……」

スイが助けに来てくれたことがうれしくて、ホツとしてぼろぼろと涙を流す。



私の頭をやさしくなでて、スイは困ったように笑うんだ。  
「もう泣くな。俺が守ってやるから」

その微笑みは、どこまでも美しく、頼もしくて――

体中が心臓になってしまったみたいに、バクバクするの。

だけど、いつもここで夢は終わってしまう。

光の粒が空に舞い、闇がすーっと消えて、まぶたの奥が白くなって……

「……ああ、目が覚めちゃった」

名残惜しきとともに目を開くと、部屋の天井が見えて、いつもがっかりする。

スイの声も、あのやさしい笑顔も全部、今は夢でしか見られないから。

龍神様の祠と、泉。キラキラと光る水面。

私に微笑みかける、きれいなお顔。

思い出の場所と、やさしくてかっこよくて強い初恋の人のこと、絶対忘れたくないのに。透きとおった青い瞳と、輝く銀色の髪しか、はつきり覚えていない。

だから、私は夢を見るたびに、薄れゆく記憶を取り戻したくて、スイの姿をしっかりと目に焼き付けるんだ。

#### ④ 言えない夢

「行ってきます！」

「行ってらっしゃい、飛鳥。帰ってきたら、誕生日プレゼントなにがいいか教えてね」

「わかった〜！」

翌朝、お母さんの元気な笑顔に見送られて、家を出た。

天翔神社のひとり娘……なんていつても、学校ではふつうの生徒のひとり。

朝のチャイムにあわてて教室にすべりこんだり、テスト前に「やばいく！」って言いながらノートを見せ合ったり。

神社では巫女になる準備をしてるけど、学校ではへつぼこ中学生なのだ。

一年二組の教室に入るとすぐに、机にプリントを広げてつつぶしているツインテールが目に飛び込んできた。

「おはよう、琴美」

「あ、飛鳥。おはよう……」

ガバツと頭を上げた琴美の顔が、この世の終わり……みたいになってる。

「ど、どうしたの？」

「宿題が終わんなくてさ〜。あと少しなんだけど」

「がんばれ〜」

「うわっ。心がこもってない！」

「こもってるから〜！ がんばれ琴美！ 琴美、がんばれ！」

「気が散るんですけど〜」

「ひっど〜い！」

心を込めたエールに、ジトツとした目を向けられて、思わずふき出しちゃった。

琴美もブハッと大笑い！

私たちは、毎日こんな感じ。

学校でいちばん仲がいいのが、琴美。

明るくて、元気で、誰とでもすぐ仲良くなれる子なんだよ。

ちがう小学校だったから、お互い昔のことは知らない。

私には、人生最大失敗レベルの黒歴史が二つもあるんだけど、琴美は知らない……と思う。

「飛鳥つてき、将来は天翔神社を継ぐんだよね？ 神主になるの？」

数学の宿題を終えた琴美は、別のプリントを机に広げながら、突然そんなことを聞いてきた。

「えっ……あー、うーん……」

神主ではないけど、巫女になるよ！ もうすぐ修行が始まるんだ！

……つて言えなくて、口ごもっちゃった。

「絶対に継がなくちゃいけないってわけじゃない感じ？ あれ？ 飛鳥、ひとりっ子だよね？」

「うん、そう」

「じゃあ、お嬢さんにきてもらって、神主をやってもらうとか？」

「うーん」

「ほかに目指してる職業があるパターン？」

「うーん」

「もう！ 飛鳥つたら適当すぎ。あの宿題、飛鳥だつてやってないでしょ？ 将来になりたい職業を調べるやつ！ 今日放課後までに提出つて、言われてたじゃん！」

「そ、そうだったね！」

煮え切らない態度の私にしびれを切らしたのか、琴美はズイッとプリントを突きつけてきた。「ちなみに私はね、先輩と同じ高校に行つて、同じ音大に行きたいんだ。クラリネット続けたいし、ゆくゆくは音楽関係の仕事をしたいから！」

「へえ、素敵だね！」

吹奏楽部でクラリネットを担当している琴美は、来月の定期演奏会に向けて、朝練もがんばってるんだ。

おなじ部活の先輩に片想い中で、ときどき乙女な妄想をしてる。

そんな、がんばりやで乙女な琴美が、私は大好き！

中学校で出会えて、友だちになれてよかつたつて、心から思つてる。

だけど、将来の夢とか、なりたい職業とか、その話題になるとはぐらかしてしまう。

（将来なりたい職業、か……）

もちろん、私の夢は巫女になること。

将来目指す職業は『天翔神社の巫女』一択だ。

家が神社だし、「巫女になりたい」つて言つても、変じゃないつてわかつてる。

だけど……

黒歴史を思い出しちゃって、琴美にさえ言うのが怖い。

「あとね、将来は先輩のお嫁さんになりた〜い！ でね、もうすぐ先輩の誕生日だから、プレゼントを渡して告白しちゃうかなって思ってるんだけど、どう思う？ ……って、飛鳥？ 聞いている？」

「えっ。あ、ごめん！」

はっと我に返って、あわてて謝る。

ぼんやりしている私なんてそっちのけで、琴美はうつと顔で恋バナを再開した。

「はあ〜。先輩とカレカノになりたい！ 天翔神社の例大祭でデートしたいし、クリスマスデートもしたいー！ そんなで、SNSでにおわせ投稿したーい！」

「例大祭デートにクリスマスデートか……」

「神社の娘はクリスマスとは無縁なの？」

「そんなことないよ。家にはクリスマスツリーを飾るし、プレゼントももらうし」

「そっか。じゃあ、飛鳥もデートの相手を探さなくちゃね！ だって、例大祭はもう三週間後だし、クリスマスまではあと三ヶ月しかないんだよ？」

「デートの相手って……」

もう〜。さつきまで将来になりたい職業の話をしてなかったっけ？

恋バナはちよつと苦手。

そりゃあ、私だって恋してる。してるけど……

人に言える恋じゃないから。

だって、名前も住んでるところもわからない、小さいころにちよつと遊んだ人に恋してる……なんて、変な子って思われそうで、言えないよ。

ぐるぐると考えこんでいると、琴美がキラキラした目で私をのぞき込んできた。

「飛鳥は気になる人とかいないの〜？」

「ええっ!? い、いないよ、ぜんぜん！」

ごめん、琴美。とつきにうそついちゃった……

胸の痛みが、じわじわと広がっていく。

「飛鳥のこと、気になってる男子はいるっぼいんだけどなあ〜」

「そんな人いるわけないって」

いたずらっぽく笑う琴美の横で、私は曖昧に笑ってみせる。

そのとき、ガラッと教室のドアが開いて、にぎやかな声が飛び込んできた。

「おっはよー！」  
一気に教室の中が明るくなって、入ってきた男子に、みんなが口々に話しかける。

「おはよう、陽太！」

「朝っぱらから元気だなー」

「まあなり。みんな元気だしてこーぜー！」

中原陽太は、クラスの中心的人物なんだ。

明るくて、ノリがよくて、バスケット部のエース。

いつも友達ちに囲まれていて、女子にも人気があるんだけど、私はなるべく関わらないようにしてる。

陽太とは小学校からいっしょ。

つまり、この中学校で、**私の黒歴史**を知ってる数少ない人だから。

(はあ……。中学校でも、陽太と同じクラスになっちゃうなんて……。ツイてないな)

陽太の視界に入らないように、さりげなく背を向けたのに。

「おはよう、飛鳥。相変わらずボケーっつとしてんな」

うわっ。話しかけられちゃったよ！ しかも、悪口！

「ボケーっとなんてしてないから！ シャキッとしてるから！」

しまった。スルーすればいいものを、うっかり言い返しちゃった。

「だって、ほら。寝ぐせついてんじやん」

「ちよっ。ついてないし！」

伸びてきた手を、パシッと叩く。

陽太のやつ、こうやって寝ぐせを直すフリして、ベシッでデコピンするの。

小学生のときから、ぜんぜん変わらない。

どうしてこんな子どもっぽい陽太がモテるのか、学校の七不思議だよ。

むむ？ 妙な視線を感じて振り向くと、琴美

がにやにやしてる！

「朝っぱらから仲良しなんだから〜」



「そ、そんなんじゃないって！」

周りの女子たちが、こつちを見てひそひそしてるから、はつきり否定しておかなくちゃ。

陽太のやつ、本当に迷惑なんだから！」

関わらないようにしてるのに、いつも意地悪するんだ。

さつきと自分の席に行けりって念じてみたけど、私に特別な力なんてない。

立ち去るどころか、陽太はにやりと笑って言った。

「飛鳥、宿題には、『将来の夢は神様に仕えること』って書いとけよ？」

「は？ そんなこと書かないから！」

「だって、巫女になるのが夢なんじゃなかったのかよ？」

「……っ」

うわー。最悪！ なんて小学校のときのことを覚えてるかな。

小学生のときにね、「将来の夢」っていう作文を書いたんだ。

私は、素直に「巫女になりたい」って書いたんだけど……

「巫女かー！ 飛鳥んち、神社だもんな。マジで巫女になりたいなら、学芸会で『巫女コス』

やれば？ 本番前の練習になるじゃん？」

って陽太が言い出して。

そうしたら、周りの女子たちがクスクス笑って言ったんだ。

「巫女の服、かわいいよねー！ 私も着たいー！ コスプレしたーい！」

「巫女コスって……。飛鳥ちゃん、コスプレイヤーになりたいだけなんじゃない？」

「あ、そっち系？」

女子たちがわいわい盛り上がりつつ、陽太はちよつと困った顔をしてたけど。

大切な夢を茶化されて、私はすごく悲しかった。

これが、ひとつ目の黒歴史。

すべては『巫女コス』なんて言い出した陽太のせい。

陽太なんて大嫌いだ。だけど……

何も言い返せなかったことが情けなくて、陽太よりも自分が大っ嫌いって思った。

それから私は、人前で「巫女になりたい」って言わないようになった。

からかわれるのが怖くて、本当の気持ちをのみ込んでごまかしちゃうクセがついた。

小学校でも中学校でも、友だちはいるし、いつも嫌な思いをしてるわけじゃない。

琴美に出会えたし、学校生活は毎日楽しい。

でも、中学生になった今でも、学校では『普通』を心がけてる。

——巫女になるのが夢。

——初恋の人を、今でもずっと想ってる。

——ほかの人には恋をしないって、神様に願掛けしてる。

私の心の中には、そんな誰にも言えない思いがたくさんある。

琴美なら、受け止めてくれる気がするけど、まだ勇気がでない。

万が一、琴美にも「変な子」って思われたら……

それが怖くて、みんなに「不思議ちゃん」とか、「ちょっと変な子」って言われないように、ものすごく気を付けているんだ。

中学生になったんだし、そんな自分を変えたいって思うけど……

気持ち隠してしまおう癖は、なかなか抜けない。

ため息をついたのと同時に、チャイムが鳴って担任の先生が教室に入ってきた。

「おはよう。ホームルームはじめよう」

陽太が自分の席にダッシュしたのを見て、私も急いで自分の席に座る。

「はあ……」

教室の窓の外を見つめながら、小さくため息をついた。

巫女になるのは、私にとって本気の夢。

でも、それを口に出したとたん、また誰かに笑われてしまうかもしれない。

中学校では、とにかく『普通』に、目立ちすぎず、浮かないこと。

黒歴史をくりかえすのは、もうこりこりだから。

## ⑤ 悲しい誕生日と宝物

「じゃあ、宿題のプリントを出してから帰ってね」

「はい」

放課後になり、みんなが教卓に置かれた箱に宿題を出して帰っていく。

私は結局、「人の役に立って、誰かの力になる仕事を考え中」って書いて提出した。

明日、「これどういうこと？」って、先生に呼び出されませんように……

「部活行ってくるね。バイバイ、飛鳥！」

「うん。がんばって！ また明日！」

琴美と笑顔で手を振り合って、私は教室を出た。

いよいよ明日は私の誕生日。

巫女修行が楽しみすぎて、そわそわしてしまふ。

天翔神社の巫女のお仕事は、たくさんあるんだ。

神主……つまり、お父さんのお手伝いや、神前結婚式や例大祭の準備。それにお守りや絵馬

を授与したり、御朱印やご祈祷の受付、神殿や社務所の掃除、参拝客の案内などなど。

その中でも、とつても難しいのが、**巫女神楽**。

巫女神楽は、神様にささげる舞いのことだよ。

鈴を持って、笛や太鼓にあわせて舞う、神聖な踊りなんだ。

神様に舞いや音楽を奉納することで、神様と人を結びつける役割を果たすんだって。

例大祭や儀式で、お母さんが舞う姿を、私は何度も見てきた。

それはもう、とつても厳かで。

ふわりと舞う白い袖も、お母さんも、**神秘的できれいな**の。

「いつか、私もお母さんみたいに舞いたいな」って、小さいころからずっと憧れていた。

実は、お母さんの巫女神楽を見よう見まねで覚えて、踊りの順番は頭に入ってる。

十三歳になって巫女修行が始まったら、お母さんから本格的に習うんだ。

そして、特別な巫女神楽の衣装を着て、例大祭で初披露するのが、私の目標！

巫女神楽以外に、とつても大切な仕事があって、それはお祓いと占い。

お母さんは、神社の奥でお祓いをしたり、参拝者の話に耳を傾けたりしてるの。

私も、お母さんみたいに誰かの力になりたいな。  
(よし、明日から巫女修行、がんばるぞー！)  
わくわくで胸がいつぱいになって、思わず駆けだした。  
だけど、このあと、とんでもない事態が待っていたんだ。

\*\*\*

家の玄関を開けるとすぐに、お父さんが飛び出してきた。

「飛鳥！ 大変だ！」

いつも落ち着いているお父さんが、ものすごく慌てている。

真っ青な顔を見て、ざわつといやな予感がした。

「お父さん？ どうしたの？」

「お母さんが……倒れた」

「えっ!？」

頭の中が真っ白になった。

「お母さんが、倒れた？ 今朝は、いつもどおり元気だったのに？」

「ど、どうして？」

「原因は、まだわからない……。急に意識がなくなって、さっき病院に運ばれたんだ」

「お母さん大丈夫だよ？ いつ戻ってくるの？」

「たくさん聞きたいことがあるのに、声にならない。」

「そんな……。お母さん……」

「私は何も考えられなくなって、その場に立ち尽くした。」

\*\*\*

そのあとすぐ、お父さんといっしょに病院に向かった。

「お母さんは意識を失ったまま、眠り続けていた。」

結局、入院することになったんだけど、原因はわからないまま。

お医者さんも首をかしげていた。

診察室から戻ってきたお父さんの、張りつめた顔が忘れられない。

「大丈夫だよ、飛鳥。お母さんはきつとよくなる」

その声が、少しだけ震えていた。

巫女修行は、当然、延期。

ずっと楽しみにしていたし、巫女装束に袖を通す日を、指折り数えて待っていた。でも、そんな残念な気持ちよりも、不安が膨らんでいく。

（お母さんに、二度と会えなくなったらどうしよう）

いつも笑顔で明るくて、優しく、頼りになる、大好きなお母さん。

目を閉じたままベッドに寝ている姿なんて、つらすぎて見たくないよ。

胸の奥がぎゅうつとしめつけられて、涙がこみあげてきた。

寝る前の願掛けタイムは、いつもと違うお願いをした。

（神様、お願いします！ どうかどうか、お母さんを助けてください！）

お布団の中で、心から強く願った。

\*\*\*

誕生日の朝、夢を見た。

私はひとりで森の中にいる。

いつも見る夢とは違って、穏やかで温かい。

木々のすき間から差し込んだ光が、龍神様の泉を照らしているのが見えた。

そこに……いた！

銀色の髪と、青い瞳のあの人。

スイは、まっすぐ私を見て、口を開いた。

「飛鳥、誕生日おめでと。いよいよ巫女修行だな。励めよ」

ふつと優しくほほ笑んだスイに、胸の奥がぎゅんつてふるえた。

「……飛鳥なら、だいじょうぶだ」

その言葉を聞いた瞬間、涙がぶわつとこみあげてきて――

私は泣きながら目を覚ました。

「スイ……」

まふたをあげると、朝の光がカーテンのすき間から差しこんでいた。

（夢、もう終わっちゃった。でも、スイに会えた……）

ぼんやり天井を見上げながら、ぼつりとつぶやく。

「今日、誕生日だ……」

本当だったら、巫女装束の試着をしたり、お母さんといっしょに巫女神楽の練習をしてるはずだった。

だけど現実……。お母さんは病院のベッドの上で眠ってる。

「スイ、ありがとう。でもね、巫女修行はおあずけなの」

悲しいけれど、誕生日に夢でスイに会えるなんて、うれしいよ。

まるで夢みたい……って、夢なんだけど。

(夢だけど、スイが最初に「おめでとう」を言ってくれた)

うれしくて、冷え切ってた心がじんわりと温かくなっていく。

私は涙をぬぐって、ベッドから起き上がった。

顔を洗い、制服に着替えてリビングに行くと、お味噌汁のにおいが漂っていた。

「おはよう、飛鳥」

神主姿のお父さんが、慣れない手つきでお味噌汁をよそいながら微笑んだ。

「おはよう、お父さん」

「誕生日、おめでとう」

「ありがとう」

お母さんがいない朝ごはんは、とつても静かだ。

お父さんは、申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「ごめんな。誕生日プレゼント、まだ用意できてないんだ。なにか欲しいものはないかい？」

「うーん」

欲しいものは……すぐには思いつかない。

私の望みは、お母さんが元気になって、帰ってきてほしいってことだけ。

それ以外は……あつ！ そうだ！

閃いた私は、お父さんにつめよつた。

「ねえ、お父さん！ ひとつだけお願いがあるんだけど！」

「うん？」

「神社の宝物！ 願いごとが叶うって言われてる『勾玉』、見せてくれない？」

「勾玉なら、本殿に祀つてあるだろう」

「それ、実はレプリカだよな？ 本物は、宝物庫で厳重に保管されてるってウワサなんだけ

ど……」

お父さんは、おどろいた顔をしたけれど、すぐに「わかった」とうなずいた。「宝物庫は嚴重に鍵をかけていて、神主と巫女しか入れない決まりになっているんだ。でも、今日で飛鳥は十三歳。巫女見習いとして、特別に入れてあげよう」

「やった！」

ウワサは本当ってことだ。

天翔神社の本殿の奥には、本当に宝物庫があるみたい！

お父さんが作ってくれた朝ごはんを食べ終えると、私たちは宝物庫に向かった。鍵がかかった扉をいくつも開けて、宝物庫にたどりつく。

「ここは、ご神宝が納められている神聖な場所だ。宝物には触らないように」

「はい！」

しつかりうなずくと、お父さんは扉を開けた。

宝物庫はひんやりとしていて、静けさと神秘的な空気がただよっている。

「勾玉はこれだ」

ごくつ、と喉が鳴る。

ついに……ついに、本物の勾玉を見られるんだ！

(どうしよう。緊張してきた！)

棚の上に置かれていたのは、桐の箱。

お父さんがゆつくりとふたを開けると――

「わあ……。きれいな！」

思わず感動の声がもれた。

勾玉は、歴史の教科書でよく見る形をしていた。アルファベットの『C』みたいに、丸く曲がっている。

目を奪われたのは、とっても美しい色！

深く透きとおる泉のような、神秘的な青色の

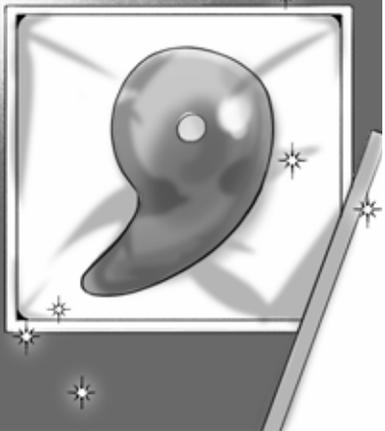
勾玉だ。

青い勾玉って、『青めのう』とか『碧玉』つ

て呼ばれる石で作られてるんだっけ。

レプリカよりも、すごくきれいな！

それにこの色……。まるでスイの瞳みたい！



「これが、『天翔の勾玉』だ。龍神さまにゆかりのある宝物だと言われている。むかし、この町に災いがふりかかったとき。龍神様の剣と、この勾玉のおかげで、難を逃れたという伝説があるんだよ」

「そうなんだ……」

「この勾玉に触っているのは、天翔神社の神主と巫女だけ。飛鳥はまだ見習いだけど、良しとしよう」

お父さんは、勾玉をそつと私の手にのせてくれた。

「わあ……」

ひんやりしているのに、なんだか……じんわりあたたかい気がする。

「これが、願い事が叶う『天翔の勾玉』……」

もしかしたら、この勾玉には、本当にすごい力があるのかもしれない。

そう思わせるような神秘的な輝きを、しばらく見つめていた。

## ⑥ 神様なんていない

学校に着いて、教室に入ると、すぐに琴美が駆け寄ってきた。

「飛鳥、お誕生日おめでとう！」

「ありがとう！」

私の誕生日、覚えてくれてるなんて、うれしいな。

でも、琴美は元気がない。どうしたんだろう。

「プレゼント、悩んだんだけど……。飛鳥の好きなもの、よくわかんなくて……」

しょんぼりしながら、琴美が可愛い文房具のセットを差し出した。

今、小中学生に大人気の、オシャレかわいいキャラクターがついている。

「うわつ、かわいい！ ありがとう！」

「えつ。本当!? 飛鳥、こういうの、好き？」

「うん！ 好きだよ！」

「そつかり。それならよかつたけど……。ムリしてない？」

そう言う琴美は、ちよつぱり困り顔だ。

「飛鳥、あまり自分のこと話してくれないから……。好きなもの、よくわからなかつたんだよね……」

「そつか。ごめん……」

肩を落とした琴美に、申し訳ない気持ち広がっていく。

琴美の元気がないのは、私のせいだつたんだ……

たしかに私は、自分のことをあまり話さない。

それは、やつぱり**黒歴史**が原因。

余計なことを言っ嫌われたくないし、変な子って思われたくなくて。

琴美とは、入学式の日仲良くなつてからずつといつしよにいて、毎日笑い合つてる。

私の話を、からかつたり笑つたりする子じやないって、わかつてるよ。

でも、自分の気持ちを隠してしまう癖は、なかなか抜けないんだ。

(琴美は、私にもつと話してほいって思つてるのかな……)

もやもや考えながら、琴美がたくさん考えてくれた結果のプレゼントをぎゅつと抱きしめた。

「でも、これほんとに大好きなの！ うれしいよ。ありがとう！」

私のことを思つて選んでくれたことも、とつても嬉しいんだ。

私の答えに、琴美がほつとしたように笑う。

そのとき、陽太がやつてきた。

「おつす、飛鳥。誕生日、おめでとうな」

「えつ。……ありがとう」

まさか、陽太が私の誕生日を知つていて、おめでどうつて言つてくれるなんて！

驚きすぎて、ポカンとしちやつた。

「なんだよ、そのリアクション」

「だつて……」

いつも意地悪ばかりなのに……つて言葉は、ギリギリでのみ込んだ。

「ふたりとも、ありがとうね」

学校でも誕生日を祝つてもらえるなんてうれしくて、心があたたかくなった。

\*\*\*

学校が終わると、私は急いで家に帰ってきた。

「ただいま〜」

お父さんの返事はない。家にはいないみたいだ。

例大祭の準備で忙しい時期だから、今夜も帰りは遅くなるんだろうな。

静まり返った家にひとりしていると、お母さんのことや、延期になった巫女修行のことを考え  
てしまつて、ずーんと気持ちが悪くなりそう。

だけど、落ち込んでなんていられない！ って、前向きな気持ちになつてるんだ。

十三歳になつたからかな。

学校で琴美と陽太にお祝いしてもらえて、うれしかったからかも。

自分の部屋に行き、琴美からもらつたプレゼントを机の上にそつと置く。

「ありがとう、琴美」

それから、窓を開けて森をながめた。

落ち込まないでいられる理由は、ほかにもある。

夢の中で、スイが誰よりも早く「誕生日おめでとう」つて言ってくれたから。

いつもの夢とはちがつて、今日は特別バージョンだった。

それに、お父さんに本物の勾玉を見せてもらえたことも、うれしかった。

願いをかなえてくれる勾玉は、すごく神秘的で、本当に奇跡が起きるかもつて思った。

だから、私は決めたんだ。

（お母さん、待つて！ 私が治してあげるからね）

覚悟を決めた私は、家を出て、神社の社務所に忍び込んだ。

誰もいないことを確認して、厳重に保管されている宝物庫の鍵を、そつと手に取る。

それから、お父さんがやつていたみたいに、扉の鍵をいくつも開けて、宝物庫に入った。

目当ては、勾玉。

ごくつと息をのんで、桐の箱に手を伸ばす。

そつと蓋を開けると、朝と変わらない、神秘的な輝きに目を奪われた。

「うーん。どうしよう。引き返すなら今だよね」

罪悪感と、お母さんを助けたい気持ちが心の中で戦つてる。